**Chapter XIX : Labor and Leisure**

**Chapter XX : Intellectual and Practical Studies**

**第19章：労働と閑暇**

**第20章：知的学科と実際的学科**

担当：寺澤、宮澤、渕井、水野、本村、山端

【本章の流れ】

第19章：労働と閑暇

・対立の起源

・現在の状況

第20章：知的学科と実際的学科

・経験と真の知識の対立

・経験と知識に関する近代的理論

・実験としての経験

【論点】

**①デューイが理想とする教育は、現在の日本の大学の文学部に適しているのか。**

**②慶應の文学部において、デューイが理想とする教育は行われているのか（できているのか）。**

【本文中の記述】

・Nevertheless, there is already an opportunity for an education which, keeping in mind the larger features of work, will reconcile liberal nurture with training in social serviceableness, with ability to share efficiently and happily in occupations which are productive. （p .250 l.3）

⇒ <教養> と <社会的に役立ち、生産的な仕事に能率的にそして楽しんで参加する能力の訓練> を

調和させる教育

・The problem of education in a democratic society is to do away with the dualism and to construct a course of studies which makes thought a guide of free practice for all and which makes leisure a reward of accepting responsibility for service, rather than a state of exemption from it.（p.251 l.3）

　⇒民主的社会の教育の問題は、二元的対立を排除して、思考を自由な実践の指針とし、閑暇を奉仕から免除された状態というよりはむしろ、奉仕の責任を受け入れたことの報酬となる課程を構成することである。

◇「経験」について

・Experience itself primarily consists of the active relations subsisting between a human being and his natural and social surroundings.　（p.262 l.39）

⇒経験そのものは、元来、人間とその自然的および社会的環境との間に存在する諸関係から成り立っている。

◇学科と活動の関係

・A slight inspection of the improved methods which have already shown themselves effective in education will reveal that they have laid hold, more or less consciously, upon the fact that “intellectual” studies instead of being opposed to active pursuits represent an intellectualizing of practical pursuits. （p.263 l.31）

⇒「知的な」学科は、活動的な仕事（≒実践的活動）と対立することにはならず、かえって実際的な仕事の知性化を意味する。

◇デューイの目指す教育像

・But this fact only gives an added reason why schooling should use these pursuits so as to enable the coming generation to acquire a comprehension now too generally lacking, and thus enable persons to carry on their pursuits intelligently instead of blindly. （p.264 l.12）

⇒学校教育は、これらの仕事（＝家事や農業や製造業）を活用して、次の世代の人々が、今日あまりにも一般に不足している理解を得ることができるようにし、人々が自分たちの仕事を盲目的にではなく、知的に営むことができるようにしなければならない。

【参考】[[1]](#footnote-1)

◇慶應義塾大学文学部 概要

　文学部の特色は、17もの専攻と自然科学・諸言語の2つの部門をもつ多様性にあります。その幅広い学問領域の中で、人間や社会のあり方、文明の本質等を深く追求し、豊かな教養と深い専門性を身につけた学生諸君を送り出すことを、教育と研究の目的としています。その結果、様々な情報が飛び交い混迷する世の中に在って、文学部は自己を見失わないすぐれた卒業生を送り出し続けているのです。
　文学部は1890（明治23）年1月、慶應義塾の大学開設にあたり、理財科・法律科とともに文学科が創設されたのがはじまりで、1910（明治43）年に文学、史学、哲学の3専攻に別れ、専門教育の改革が進みます。（中略）

　第二次世界大戦後の新制大学の発足にともない、何度かの改組をへて現在の17専攻になりましたが、つねに文学部が目指しているのは、次のようなことです。世の中は実に多様で、いろいろなものの見方・考え方があります。その中に在って他者の存在を尊重し、思いやりの心で接しながら、けっして流されることなく自分の意見を責任を持ってしっかり述べることの出来る人物、 そうした人物の育成こそ、文学部の理念であり目標であるということです。
　そういう人物になるためには、幅広い教養を身につけ、また同時に深い専門性を習得することが大切です。世の中の急激な変化によって、既存の世界観や歴史観・倫理観等が根本的に問い直されている今こそ、慶應義塾大学文学部で学ぶことの重要性は高まっています。ぜひこの学舎で、じっくりと自己形成に取り組んでください。

◇慶應義塾大学文学部 カリキュラム概要

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 第1学年 | 第2学年 | 第3学年 | 第4学年 |
|  | 総合教育科目、語学科目を中心に学び、進むべき専攻を考えながら幅広く勉強していく。 | 自分の所属する専攻が決まり、専門領域を学び始める。 | 専攻によって開始時期は異なるが、研究会（ゼミ）に所属し、具体的テーマをもって研究を進める。 | 研究会での勉学の集大成として、卒業論文を作成する。社会学・人間科学の2専攻には非卒論コースもあり。 |
| 総合教育科目 | 系列科目　　卒業までに、各系列から、それぞれ8単位以上履修●人文科学系列●社会科学系列●自然科学系列 | 第2学年進級時に16単位以上履修、卒業までに計38単位以上履修 |
| 系列外科目●基礎情報処理科目、総合教育セミナーなど特定の系列に属さない科目●語学科目　必修語学科目のうち必修として履修しない科目　必修語学以外の語種（ギリシア語など）の科目　インテンシブ・会話など特殊な形態の語学科目●体育研究所、国際センター（日吉）、情報処理教育室、教養研究センター、外国語教育研究センター、福澤研究センター（日吉）、保健管理センターなどの設置科目●他学部設置の総合教育科目相当科目 |
| 必修語学科目 | 英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、ロシア語、スペイン語、イタリア語の中から2語種を必修選択。※留学生の必修語学は原則として英語と日本語。※東洋史学専攻では2年生からアラビア語、ペルシア語、トルコ語も可。 | 英語を含む2語種を選択した場合、計14または18単位。英語以外の2語種を選択した場合、計16または20単位（専攻により異なる） |
| 専門教育科目 |  | 哲学専攻倫理学専攻美学美術史学専攻日本史学専攻東洋史学専攻西洋史学専攻民族学考古学専攻国文学専攻中国文学専攻英米文学専攻独文学専攻仏文学専攻図書館・情報学専攻社会学専攻心理学専攻教育学専攻人間科学専攻 | ・各専攻設置の専門教育科目（専攻ごとに必修科目・選択科目を定めている）・全専攻共通科目・教職課程センター、国際センター（三田）、日本語・日本文化教育センター、斯道文庫、メディア・コミュニケーション研究所、知的資産センター、言語文化研究所などの設置科目・他学部設置の専門教育科目相当科目 | 計72または76単位以上（専攻により異なる） |

1. 慶應義塾大学文学部ホームページ

http://www.flet.keio.ac.jp　（取得日：2016年1月11日） [↑](#footnote-ref-1)